

B 101 複合布としての和服地 — 2, 3の消費性能について(サ一報)

平安女学院短大 ○森田智子 堀田延子 池永彰作

目的 平面的に構成される和服を立体的な人体に着装した時、布のすべり摩擦や剪断変形性とタックの処理や紐、帯による衣服圧などの操作が加わって、非活動的であり、タリ、着装の乱れが生じたりする。着心地の良否、着装の乱れの生じる要因を検討するために、表地と裏地が一体となった複合布としての和服地の性能や動きを分析した。

方法 試料布として表地、裏地(胸裏、裾廻り)の各々に絹、綿、ポリエステル、プロミックスの4種類を使用した。静摩擦、動摩擦、圧縮弾性、曲げ変形特性、剪断変形特性、表面形状などの物性テストを行った。また、各々の素材を組合せてセ物衿長着を作成して着装テストを行った。日常生活の中の動作としての平地歩行、階段の昇降、椅坐、正坐、上肢の上拳などによる着装の乱れの状況をとらえた。

結果 摩擦や剪断変形など布のすべりや歪に対する性質の程度が着装の乱れの要因となる。本実験では絹、ポリエステル、プロミックス、綿という順に着装の乱れが生じにくく、綿は他の3種類とは異なった傾向を示した。平地歩行や階段の昇降の際の着装変化は、下前裾や後裾で表の方へ折り返りが生じるが、静止すると同時に元にもどるので着装の乱れは生じていない。椅坐、正坐は臀部と膝がタテ、ヨコ方向に引張られ、特にタテ方向への引張りが強く、下半身に着装の乱れが生じる。しかし、綿でも引張られて伸びた布地が再復してしまうことが多く、着装の乱れの程度は意外に少なかった。